

## 膠原病と向き合い暮らすこと

東病棟9階 ○戸出亜沙子 土本千春 倉田真琴 宮岸里美  
青山さと美 筒井翔子 朝倉恵美 福間明美

key word : 膠原病 病気と向き合う 患者心理  
暮らす 体験

### はじめに

膠原病は、慢性に経過し寛解と再燃を繰り返しながら進行する結合組織病である。全身性の自己免疫疾患の機序が関与していると考えられているが、完全な病態の解明はなされていない。有効な原因治療は見つかっておらず、現在の最新医療をもってしても対処療法が主であり難病とされる。また、膠原病はそれぞれの疾患や個人により症状・経過・予後、そして治療方法が全く異なっている。そのため、膠原病患者の看護において患者の心理や生活・人生への看護援助は、より個別性に富んだものであることが必要とされる。

ある患者は5回目の入院で初めて「この病気と付き合っていくなんて、今回の入院で実感した。」と語った。初回入院時から病気の説明、生活上での注意点などの助言・援助は行っていたが、繰り返しの再燃・寛解の中で初めて「病気とつきあう」ことを実感できた。このことは、私たち医療者側の考えている「病気とつきあう」ことの認識や膠原病患者自身の理解が不十分であり、さらには昨今の医療の進歩による療養変化に対応していない可能性があると考えられた。膠原病に関する認知度は一般的にも低く、看護の分野においても先行研究が少ないのが現状である。そこで、膠原病患者がどのような思いを抱き、今を暮らしているのかを知る必要性があると考えた。

### I. 目的

患者が膠原病を持ちながら暮らすということを知ること。

### II. 研究方法

1. 参加者 現在当院に外来通院中の膠原病患者のうち本研究に同意を得られた者14名。
2. 期間 平成18年6月～10月
3. データ収集方法 研究者2名が個別に半構成的面接を行い、テープに録音した面接内容を逐語録に起こしデータとした。インタビューガイドは、病気であると言われた時の思いと今の思い、うまく生活していくための工夫、膠原病についてどのように思うか、家族や周りの方の思い、今の自分をどのように思うかであり、面接の状況から目的に沿ってさらに深めていった。

4. データ分析方法 グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。まず、逐語録を繰り返し熟読し、データが意味するものを読み取り、同じ意味内容の概念を整理しコード化した。概念を統合できるものはサブカテゴリー、さらに類似するサブカテゴリーはまとめてカテゴリーとした。「膠原病と向き合い暮らすこと」を中心に次元と特性を熟考し、それぞれの事例や状況において継続比較を行った。参加者一人一人の思いの流れにも着眼し、各カテゴリー間の関連を分析し図式化した。

分析過程においては、研究者間で納得のいくまで検討を繰り返し、信頼性と妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮 研究の目的・内容・方法、面接をテープに録音すること、得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと、プライバシーを守ること、個人が特定されないこと、同意しなくても診療や看護に不利益がないことを説明し、同意書へのサインをもって同意を得た。同意書は専用BOXにて回収した。

### III. 結果

#### 1. 参加者の概要

年齢：30～72歳、性別：男性5名・女性9名  
疾患：慢性関節リウマチ4名・全身性エリテマトーデス4名・強直性脊椎炎2名・強皮症1名・多発性筋炎1名・ウェゲナー肉芽腫1名・混合性結合組織病1名、病歴：1年～28年

#### 2. 各カテゴリーの説明

分析の結果10のカテゴリーに分類された。各カテゴリー・サブカテゴリーと実例は表1に示す。以下、カテゴリーを<>、サブカテゴリーを《》で表す。

##### 1) <死ぬほどつらいと思った体験>

受診のきっかけとなった激しい疼痛や、命の危険を感じるような症状の出現を経験したこと。

##### 2) <病気のわかりにくさ>

患者にとって理解しがたい病態であり、診断困難な、専門性が必要とされる病気であるという思い。《受診をしてもなかなか診断がつかないつらさ》や《診断がついても病気を理解できない》からなる。

##### 3) <病気と一生つきあっていくと自覚する>

自分に起こった病気は生涯完治しないものであり、死ぬまでつきあう必要があることを自覚する。

##### 4) <病気との折り合いをつけている今の自分>

病気を持ち生きている自分を今どのように捉えているかという思い。

#### 5) <探りながら自分なりに身につける生活方法>

自分なりの楽な生活方法を日常生活の中で体得し行っていること。《病気によってできないこと》《病気を抱えていてもできていること》からなる。

#### 6) <治療効果の実感>

治療により症状が軽快・改善したと実感すること。

#### 7) <医療への信頼>

安心できる医療と、生きるために支えとしている薬への思い。《医療機関や医療者への信頼》《欠かすことのできない薬》からなる。

#### 8) <周囲の人に対する思い>

周囲の人との関係から生じる様々な思い。《わかってもらえない》《わかるわけがない》《わかってもらえない》からなる。

#### 9) <病気を持ったことにより変化する自己価値>

自己または自分を取り巻く周囲との関係の中で認識した病気を持つ自分の価値。《自分の人生の中での病気の意味づけ》《他者と比較した病気を持つ自分》《病気があっても役に立つ》からなる。

#### 10) <不安と期待>

今後の見通しを予測し医療の発展を望むことで生じる自分の未来の姿への思い。《この先どうなるかわからない》《今が続けば良い》《今よりも良くなりたい》からなる。

### 3. 各カテゴリー間の関連性

『膠原病と向き合い暮らすこと』はイメージ図として描くことができた(図1)。

膠原病と向き合い暮らす患者は<死ぬほどつらいと思った体験>をし、<病気のわかりにくさ>を感じるが、いずれ<病気と一生つきあっていくと自覚する>。このことをきっかけに<病気を持ったことにより変化する自己価値>にも影響し<病気との折り合いをつけている今の自分>を語る。そして今の自分は、<治療効果の実感><医療への信頼>、<探りながら自分なりに身につける生活方法>、<周囲の人に対する思い><病気を持ったことにより変化する自己価値>、これらの相互作用によりなる。

また、膠原病の<病気のわかりにくさ>は<治療効果の実感>により変化し<医療への信頼>を強め<不安と期待>を持たせていた。

### IV. 考察

本研究により『膠原病と向き合い暮らすこと』は、イメージ図全体で描くことができた。過去の体験や思いが現在に影響しさらには今後へとつながること、現在の暮らしは相互作用であること、膠原病を持つ患者の看護への活用性について考察する。

#### 1. 過去の体験や思いが現在に影響し今後へとつながること

患者は、<死ぬほどつらいと思った体験>をし、<病気のわかりにくさ>を感じるが、<病気と一生

つきあっていくと自覚する>ことをきっかけとし、現在の<病気との折り合いをつけている今の自分>を語っていた。過去の体験や思いを持ちながら現在の自分へと続いており、そこから今後の<不安や期待>へとつながっていた。これは、膠原病患者がこれまで病気をもちながら暮らしてきたことそのものであり、慢性疾患の病みの軌跡の理論<sup>1)</sup>における病みの行路としても説明可能であると考えられる。

中でも<死ぬほどつらいと思った体験><病気のわかりにくさ>は膠原病に特徴的であると考えられる。膠原病の症状は様々で、わかりにくい病気であり、初期症状の発見が遅れることが多いことから、自覚症状として<死ぬほどつらいと思った体験>になるまで受診が遅れると考えられる。しかし、<死ぬほどつらいと思った体験>は<治療効果の実感>により「楽になる」ことで<医療への信頼>へとつながる。膠原病は糖尿病等のように食事療法や運動療法でのコントロールができるものではなく、薬物療法が必要不可欠とされる。さらに、その人の病状から生活までもを左右する大きな影響となるため、膠原病をもち暮らす中で、薬や医師など<医療への信頼>が大きいと考える。しかし、薬の効果を感ずるとともによく効く薬への恐怖感なども感じ<不安と期待>を語っていたと考える。

膠原病患者は病気が生涯完治しないものであり死ぬまで病気とつきあう必要があることを自覚しながら<病気との折り合いをつけている今の自分>を語る。『膠原病と向き合い暮らすこと』はその不確定さの中で、完治しない病気とつきあいながらいかに安定した暮らしを送っていきけるかではないかと考える。

#### 2. 現在の暮らしはそれぞれの相互作用であること

<病気との折り合いをつけている今の自分>は<治療効果の実感><医療への信頼>という病気の面、日々<探りながら自分なりの生活方法を身につける>生活活動の面、<周囲の人に対する思い><病気を持ったことにより変化する自己価値>の生活史の面、これらそれぞれの相互作用と、<病気との折り合いをつけている今の自分>との相互作用により成り立っており、これらは看護の方向付けのポイントとなると考える。

中でも<治療効果の実感>は現在の自分に大きな影響を与えている。疼痛が軽減してきたからこそ医師に感謝を感じる、病態が軽快してきたからこそ現在が良いと思え、「良くなっていなければそのように思えない」という思いも聞かれたことより<治療効果の実感>なくしては現在の自分ではいられない。よって<病気との折り合いをつけている今の自分>を支えるカテゴリーとして位置づけられると考える。

次に、<探りながら自分なりに身につける生活方法>は、膠原病の病態・症状が個々により様々であ

るため、日常生活動作の中でできること、できないことが個人により様々である。しかし、患者自身は病気をもち暮らす中で、試行錯誤しながら、あるいは自然に「どうすると楽になるのか、自分の病気が悪化するのかがわかる」と語り、具体的な生活方法を見つけることができていた。これは医療者側の教育による生活方法の獲得は少なく、患者自身が生活方法と症状から因果関係を把握し、病気悪化の防御の手段、調子の良い状態を維持する自分なりの生活方法を獲得していることが多いという現実と考える。このく探りながら自分なりに身につける生活方法>は、く死ぬほどつらいと思った体験>を繰り返したくない思いや、自分なりの様々な体験から慎重になり、徐々に獲得していくものであると考えられる。看護としては、今行っている教育方法が現実に対応していないと自覚し、実際行われている生活方法の具体例を患者の生の声から考える必要がある。さらには、それを提示し、具体的な療養行動を患者自ら体験し獲得できるような支援的援助を行っていく必要があると考える。

### 3. 膠原病をもつ患者の看護への活用について

本研究の結果より、膠原病をもつ患者の看護への活用としては、患者の過去の体験を理解し、病気、生活史、日常の生活活動と、病気をもった今の自分とこれからの自分への思い、それらの相互の影響を充分アセスメントする必要があり、このことにより看護介入の効果を最大限に高めることができると考える。現在の医療や看護では、膠原病の急性期に関わることが主であるが、入院をその人の病みの軌跡を方向付ける一機会として積極的に援助することが『膠原病と向き合い暮らすこと』をさらによりよいものにすると考え。看護者は教育・カウンセリング・調整などの能力を有し、総合的・技術的に関わるのに適任である<sup>1)</sup>。看護者は膠原病患者の入院中の看護として、く死ぬほどつらいと思った体験>からく病気のわかりにくさ>を共に感じ、く病気と一生つきあっていくと自覚する>というその後の暮らしに大きな影響を与える時期に関わる重大性を認識し、く病気との折り合いをつけている今の自分>を少しでも安定した質の高いものにする援助を積極的に行う必要がある。

### V. おわりに

本研究は、膠原病という大きな概念での研究であり、個別性を重視した看護を行うためには今後具体的指針を見出す研究の必要性がある。また、今回の研究で患者は「膠原病に入るんですか?」「膠原病より私の病気はまだいい」などと語り、自分の病気＝膠原病としていない傾向がわかった。膠原病は以前のような怖いイメージは薄れ、かわりに難病という、闘うまたは共存とするものといった変化が現れつつ

あり、看護側もイメージの変化に対応した看護の展開を行なっていく必要があると考える。

### VI. 結論

1. 『膠原病と向き合い暮らすこと』はく死ぬほどつらいと思った体験>をし、く病気のわかりにくさ>を感じるがく病気と一生つきあっていくと自覚する>をきっかけにく病気との折り合いをつけている今の自分>を保ちく不安と期待>を持つことである。
2. く病気との折り合いをつけている今の自分>はく治療効果の実感>く医療への信頼>く探りながら自分なりに身につける生活方法>く周囲の人に対する思い>く病気を持ったことにより変化する自己価値>これらの相互作用によりなる。
3. 膠原病のく病気のわかりにくさ>はく治療効果の実感>により変化しく医療への信頼>を強めく不安と期待>を持たせる。

### 引用文献・参考文献

- 1) ピエール ウグ、黒江ゆり子、市橋恵子、寶田穂訳：慢性疾患の病みの奇跡ーコービンとストラウスによる看護モデルー、医学書院、1995。
- 2) 福田和明：全身性エリテマトーデス女性病者の他者との関係性における体験、日本看護科学学会誌、25巻、2号、56-64、2005。
- 3) 大内さと子、平葉子：膠原病を発症した青年期患者の心理状況ーインタビューをKJ法で分析してー、第33回日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ)、90-92、2002。
- 4) 矢倉紀子、谷垣静子：難病患者の疾病受容過程に関する検討ー自己免疫疾患患者を主としたグループインタビュー法を用いー、日本難病看護学会誌、第7巻、第3号、172-179、2003。
- 5) 村島温子監修：健康ライブラリー イラスト版 膠原病の直し方、講談社、2003。
- 6) 氏家幸子監修、土居洋子、小松浩子編集：C. 慢性疾患患者の看護 成人看護学、廣川書店、1997。
- 7) 松浦美喜雄編：実践 リウマチ・膠原病ケア、JJN スペシャル 78、医学書院、2006。

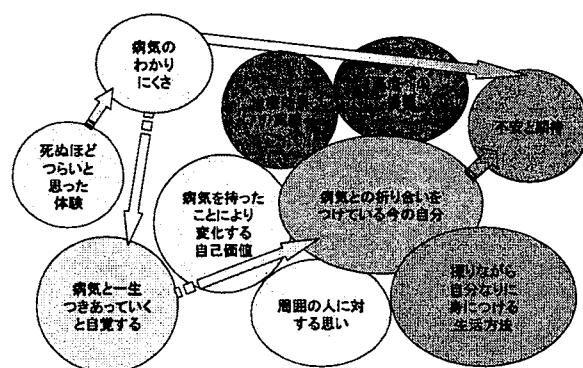


図1 「膠原病と向き合い暮らすこと」のイメージ図

表1 各カテゴリー・サブカテゴリーと事例

カテゴリー	サブカテゴリー	事例
死ぬほどつらいと思った体験		「指が真っ白になっちゃって、全部の。でびっくして、私このままじゃ死んじゃうと思って。」「朝起きる時に身体が痺れて起きられん状態やったね。そんな気が週間程続いとおかしいなと思って病院に行ったんです。」「右も左も動かれん程の痛みで、熱はかーと出とる。あの痛みは私の一生の中でない。お昼よりも痛かった。ずきっていう痛みはほんとに何とも言えん。」
病気のわかりにくさ	受診をしてもなかなか診断がつかないつらさ	「この病気やちゅうことわかるまでに、2年程ほんとにそりゃそこら辺中の病院回って歩いた。」「筋肉の症状があるから整形外科に行ってこの病気を疑われて、内科に行って筋力の値が悪いし多発性筋炎を疑われて、神経内科に行った。総合病院の神内であんなに多発性筋炎でしようけど、筋肉探らないと診断つかないし、確定診断を金大でもらいましようと思われた。」「最初はやっぱり、なかなか病気の原因がわからなくて。」「病院を転々としたね、見つかるまで、わかるまで。歴史は11年かそこらになるんよ、一番最初に腰痛になったとき、病院は相当回りましたよ。20、30は軽く。整形外科でいいことか相当教えてもらったんですけど、結局整形外科の病気がないじゃないですか。」「難しい病気だから知ってる先生も少ないんでしようけど、結局わからなかったために、酷くなるまでここ(の病院)に来れなかったんでしよう。」
	診断がついても病気を理解できない	「高山病じゃない、膠原病やって言われて。聞いたことなかったから、わからなかった。」「膠原病って聞いたことないしわからんし、膠原病ってどんなやつ。」「リウマチって聞いた時、でもあれはおばあさんの病気だらうって思ったんです。例えば内臓の病気だとも思わないし、そんな免疫がうんぬんとか、そういうことはまず全然知識としてなかったですね。そこまでそういう厄介な病気だとも思わなかったし。」
病気と一生つきあっていくと自覚する		「膠原病って言うのは早い話が不治の病、治らんがやろ。」「治らんがなろうかと思いはじめたのは去年の12月に入院した時は、もしかしたら私って治らんのかなって思った。もしかしたら治らんやないんやないんやあつて。」「5回目に入った時は、この病気が治らんやないって最初から早わかってますからね。膠原病は、この病気が完全に治らんやないことは聞いてましたから。」「結局原因がわからないから治療法が無いから完治しないっていうのが、なんでだろうね。知らない間にわかった。」「結局、もう一生治らんやから結局死ぬまで付き合っていくしかない病気だからね。」「これは死ぬまで抱えて行かんん病気がやから。」「こんなもんはもうしょうがないんやと、なんでも俺がなるんやつていう、そういうことでもしょうがないんやつて、あとは何とかがして、うーん痛いなら痛いなりにでもうまく生活していける、どうやって生活していけるかちゅうことを、もう考えなしやないやんね。」「リウマチという病気が不治の病や言つて、そんなこと言つててもしやあないし、つきあっていかな我が生きられんがやから。」「治らん病気がやつて言われたんで、じゃあとはつきあっていけないうつて。」
病気との折り合いをつけている今の自分		「今のところは元氣です。」「病気と仲良くつきあってます。大丈夫です。今はいい状態です。なんとも喜んでます。」「今は日常生活に別に支障ない。普通に。」「まあ今は痛いけど、この関節の痛みは消えないんだけど、薬にはなった。」「(病気が)いいとか悪いとかじゃない。だからそういうの考えももうどうしようもない。」「少しでも痛みがよちよちで済むようにうまーつきあっていけりやええな思つて。そう思つて、療養すれば自分が楽やしね。」「なつたんだから仕方ないじゃんという感じですかね、今はとてあえず考えも仕方ないです、仕方ないことは仕方ないし、なつたもんはなつたもんで、後はどうするか。」「甲斐性のない人間やなと思つて、病気に負けていけないけどやばいけどやばいって思つた。」「うーんやつて、仕事もそんなに頑張らうと思わん。」「なつたもんは仕方ないんで、なんとかなるわいて気持ちになれば、自分一人で生きてるわけじゃないんでなんとかなるんじゃないでしょうかね。」「なつたもんは仕方ないんで、あとは病院に通いながら病気と一緒に生活できればなつて思つて。」
探りながら自分なりに身につける生活方法	病気によってできないこと	「長く歩けないことと、ずっと立つとるのがつらい。」「服の着脱、胸が上から入らない、肩が痛くて、夏になると除毛なんてまず難しい。足の爪切るとも難しいし。足が組めない。正座できないというところが足が組めないです。洋服は入れないですから、外出先では絶対探さなきゃいけない。」「腕とか普通の人はよりは伸びていないと思う。」「お酒は飲まんようにしてる、タバコはもちろん吸ってないやろ、今まで大好きやった溪流釣りを止めてしまったし」
	病気を持ってもできていくこと	「頑張らうと思つた。」「頑張らないように適当にしてる。」「今はもう(病歴が)長いし、自分で自分を調節してます。ある程度適当に。あー疲れたなと思つたら、すぐ寝たりとか、あまり無理しない。」「できることはやつて、できないことは人に頼む。自分で体験して大丈夫ならそうやってやつていけるし、調子悪いなと思つたら原因探して自分なりに対応するんやね、それでうまくいってるんやね。」「自分で自分なりに、そうしたら楽やつてることがはやねえ長いことやつてるとわかるんですよ、こうしたら楽になる、こうしたらいいかんないかって自分でわかつて。」「痛くないように体が多分動いてる。痛かつたら違う姿勢にすると思うけど、そうするのは体がもう染み付いたみたいで、しゃがんだ方が楽で体が覚えたから、今度しゃがむようになってそれが癖になつたというか。」
治療効果の実感		「レミケード一回打つ毎には少しずつ楽になつてくるわ。」「痛みが減ってきてると、検査数値が下がってきたつてのと、あのプレドニンの量が1mgずつ減つてくると、やっぱりCRPの数値もね、CRPの数値とプレドニンやね。」「ここに来た時のこと思つたら天と地やわね、それからみると夢見たいや。痛くないもん。」「昔より調子良くなって(ここ入院する)1年前とは雲泥の差。今じゃだいたい動けるようになって走ることもできるようになつた。」
医療への信頼	医療機関や医療者への信頼	「先生神様よ。先生もちろん感謝しとる。今回あの先生にお世話になつてすごくよかったです。すべて任そうと思つて。」「やつて先生信頼してるからか困つたことないし。先生に信頼して何でも言えるつてことが、言え一番の薬かな。」「やつて大学に通う方なんです。」「ここにおればどんな病気で、対応できるでしょ、救急車で来てすぐに対応してくれるやろ。それが一番いいことですね。」「ここだと、他の病院では受けられない治療も受けられるし、いいのかな。」「うち帰ったら台所くらいできるようになりますよつて言われた時安心したわあ。あーうれしいうつて思つた。」
	欠かすことのできない薬	「薬は欠かせんかね、今の薬は飲んでいかんと今の調子のいいのは保てない。」「この薬がないと生きていかれんやうこと早わかってますから。薬さえ飲んでおればね。」「ステロイド使つて良くなって、悪影響も無くて良かった。薬を飲んでるから調子がいいのかな。薬を飲まなかったらどうなるんかなと思つたことある。」「5回入院した中で現在がいっぱい薬を飲んでる。レミケード打つてから。」「病院が好きとか嫌いとか言つてられない、だって注射なくなつたらまた(発症時)同じような状態になるから。あんな思いはもうしたくないので。」
周囲の人に対する思い	わかってもらえない	「見た目に普通やから何ちんたら歩いとるつて思われるし、私勝手曲げられないし正座できんかったから、あの子若いのにつて親戚の場とか辛かった。」「いこじ」になつていた。」
	わかるわけがない	「友達には「体調どうや」くらいしか聞いてこない。何か大きな病気があったことあるのは知っている。聞いてきたら言うけど、膠原病やつて多発性筋炎やつて言つて…言うけど、多分分かってない。」「ずつと会わないで会うような人には会いたくないです。あんなにみすばらしくなつたかと思われるのがすごく嫌なんです。どう思うやろつて。えらい老けたな、年よりも老けたなと思われるの、それが嫌なんや。」
	わかってもらえる	「夫の母は同居だし分かってくれてると思うけど、仕事はそれまでやっていた仕事を在宅でやっていた。理解があるし思われてると思う。」「主人は元氣な人で、自分が元氣でおられるから私が全部背負つてくれるみたい。」「この間言つてました。具合悪くなると、タクシー呼ばべいいのに、娘のところに電話したら、娘が心配して走ってくれるんです。」「夫婦関係は今の方がうまいつて感じるんや。今は2人3脚の形やから。病気がいいこともあるげんよ。今は、でんこととはしてらおうと思つた。」「自分一人で生きていくわけじゃないんで、周りがサポートしてくれると思う。」「職場の人たちも(症状が)軽いのを見てるので心配してくれて。薬に耐えられないのを見たら私にはいいな」つて。」
病気を持ったことにより変化する自己価値	自分の人生の中での病気の意味付け	「一病息災でなお元氣にいたいてるかなつて思つてます。」「大体人間節制やあ、60節目言うけども、その節目の前になつたというのはその治す体力があつた時になつたことやから喜ばんん思つて。」「私勝手に目にあつたけど、よかったかなと思つて。もうちょっと若かつたら…いや若い時に病気になるんやない。若い時なんか子育ての真ん中やつたらそんなもん家の中を回つていけるか。」「これはもう必要なことで、これを乗り越えるためにきつとあつて、試練つていう風に考えて新しい痛みがきてても「ふん」とか思つて。これを乗り越えるために私はいるんだみたいな。」
	他者と比較した病気をもち自分	「私は楽な方やと思つて。私はまだ恵まれてる方やけど。」「例えば癌みたいは何年か生きられん病気でないし、リウマチみたいに朝起きたら痛くて痛くておれんという病気でないし。」「若いのに癌になると切除除いたんやない。そんな若いのに頑張つてると、大変なものと、ようやうなつて、たかがこんだけの自分があつたこと言つてるのは慣れなくて。」「特に私なんてそう大したことないじゃんつていうのもあつて、だから逆にこの病院来てよかったのになつて。」「友達とか家族とかになると皆んな元氣だから、同じ年の人つてみんな元氣だとそれを見ちゃうと落ち込むんです。」
不安と期待	病気があつても役に立つ	「心配してくれるつてことは、自分がまだ必要な人間なやなつてことは、自分で理解できるから。まだ生きてる価値はあるかなつていうのがわかるんで。」「我がの体も迷惑かけとつて、本人としては少しでも何か役に立たんかと思つて、思うわな。」
	この先どうなるかわからない	「レミケード効かん時が来るだろうと思つてるんで、もしかしてまったく両手両足かかん立ち上がれんくなつたときはどうしようとか、常に考えてる。」「内科の合併症出るかもしれんつてのが一番怖い。ステロイド飲んでると糖尿になるかもしれんつて聞いたし、筋肉でも肺につか…とか。」「やつて年いって何かあつたらちよつと不安。つていうか今後どうなるんやろつていう不安つていうのはありますけども、これ以上悪くならんかたらしいんやけど、悪くならん訳がないし。」
	今が続きば良い	「別に日常生活に抗体があつてもなくてもやぞ、たくさんなかつたら普通に暮らしてれるでしょう。それでいいと思つてる。治らん、治るつていいわんでね、別に、普通に生活できれば。」「今のところは元氣です。1日でも元氣におればいいなと思つて。」
今よりも良くなりしたい	「もうちょっと良くなるかとねえ。そんなこと言うてもいかんね。そんなでもほら、車に乗つてどっか行けるようになれば。ちよつと休みの日にでもどっか行ける。車でもしよつと買い物でも行けたらいいな。」「この病気の原因がわかつたんでか。この原因を解明していただければと思います。」「なんとかが痛み止めの薬を減らしていきたい、減らしていきたい、なんとかが、薬飲まないでいける。」「新薬があつてきたつて言えば、試す。」	